

新潮文庫

夫 婦 善 哉

織田作之助 著



新潮社

娘 と 私



定価 200 円

新 潮 文 庫

昭和三十六年七月十五日 発行
昭和四十一年十二月十日 十八刷

著 者 獅 子 文 六

発行者 東京都新宿区矢来町七一
佐 藤 亮 一

発行所 東京都新宿区矢来町七一
株式会社 新 潮 社

電話東京二六〇局一一二(大代)
振替 東京 八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社 製本・憲専堂製本所

© Printed in Japan

新潮文庫

哉 善 婦 夫

織田作之助 著

新潮社 版

目次

夫 婦 善 哉	七
木 の 都	三
六 白 金 星	七
アド・バルーン	一〇
世 相	一四
競 馬	一七

解説 青野季吉

夫
婦
善
哉

夫
婦
善
哉

年中借金取が出はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、油屋、八百屋、鰯屋、乾物屋、炭屋、米屋、家主その他、いづれも厳しい催促だつた。路地の入口で牛蒡、蓮根、芋、三ツ葉、蒟蒻、紅生姜、鰯、鰯など一錢天婦羅を揚げて商つてゐる種吉は借金取の姿が見えると、下向いてにはかに饅飩粉をこねる眞似した。近所の小供たちも、「おつさん、はよ牛蒡揚げてんかいナ」と待て暫しがなく、「よつしや、今揚げたアるぜ」といふものの搥鉢の底をごしごしやるだけで、水漬の落ちたのも氣付かなかつた。

種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合ふと、女房のお辰は種吉とは大分違つて、借金取の動作に注意の目をくばつた。催促の身振りが餘つて腰掛けてゐる板の間を一寸でもたゝくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たゝいて、あんた、それで宜ろしおまんのんか」と血相かへるのだつた。「そこは家の神様が宿つたはるところだつせ」

芝居の積りだがそれでも矢張り興奮するのか、聲に泪がまじる位であるから、相手は驚いて、「無茶いひなはんナ、何も私はたゝかしまへんぜ」とむしろ開き直り、二、三度押問答の擧句、結局お辰はいひ負けて、素手では歸せぬ羽目になり、五十錢か一圓だけ身を切られる想ひで渡さねばならなかつた。それでも、一度だけだが、板の間のことをその場で指摘されると、何とも言

ひ譚けのない困り方でいきなり平身低頭して詫びを入れ、はふくの體で逃げ歸つた借金取があつたと、きまつてあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であつた。

そんな母親を蝶子は見つともないとも哀れとも思つた。それで、母親を欺して買食ひの金をせしめたり、天婦羅の賣上箱から小錢を盗んだりして來たことが、ちよつと後悔された。種吉の天婦羅は味で賣つてなか／＼評判よかつたが、そのため損をしてゐるやうだつた。蓮根でも蒟蒻でも頗る厚身で、お辰の目にも引き合はぬと見えたが、種吉は算盤おいてみて、「七厘の元を一錢に商つて損するわけはない」家に金の残らぬのは前々の借金で毎日の賣上げが喰込んで行くためだとの種吉の言ひ分は尤もだつたが、しかし、十二歳の蝶子には、父親の算盤には炭代や醬油代がはいつてゐないと知れた。

天婦羅だけでは立ち行かぬから、近所に葬式があるたびに、駕籠かき人足に雇はれた。氏神の夏祭には、水着を着てお宮の大提燈を擔いで練ると、日當九十錢になつた。鎧を着ると三十錢あがりだつた。種吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約したから、祭の日通り掛りに見て、種吉は肩身の狭い想ひをし、鎧の下を汗が走つた。

よく／＼貧乏したので、蝶子が小學校を卒へると、あわてて女中奉公に出した。俗に、河童横丁の材木屋の主人から随分と良い條件で話があつたので、お辰の顔に思ひがけぬ血色が出たが、ゆく／＼は妾にしろとの肚が讀めて父親はうんと言はず、日本橋三丁目の古着屋へばかに悪い條件で女中奉公させた。河童横丁は昔河童が棲んでゐたといはれ、忌はれて二束三文だつたその

土地を材木屋の先代が買ひ取つて、借家を建て、今はきびしく高い家賃も取るから金が出来て、河童は材木屋だと蔭口きかれてゐたが、妾が何人もゐて若い生血を吸ふからといふ意味もあるらしかつた。蝶子はむく／＼女めいて、顔立ちも小ぢんまり整ひ、材木屋はさすがに爛眼だつた。

日本橋の古着屋で半年餘り辛抱が續いた。冬の朝、黒門市場くろもんへの買出しに廻り道して古着屋の前を通り掛つた種吉は、店先を掃除してゐる蝶子の手が赤ぎれて血がにじんでゐるのを見て、そのまゝはいつて掛け合ひ、連れ戻した。そして所望されるまゝに曾根崎新地のお茶屋へおちよぼ（藝者の下地ッ子）にやつた。

種吉の手に五十圓の金がいり、之は借金拂ひでみる／＼消えたが、あとにも先にも纏まつて受けとつたのはそれ切りだつた。もとより左團扇の氣持はなかつたから、十七のとき蝶子が藝者になると聞いて、この父にはかに狼狽した。お披露目をするといつてもまさか天婦羅を配つて歩くわけには行かず、祝儀、衣裳、心付けなど大變な物入りで、のみこんで抱主が出してくれるのはいゝが、それは前借になるから、いはば蝶子を縛る勘定になると、反對した。が、結局持前の陽氣好きの氣性が環境に染まつて是非に藝者になりたいと蝶子に駄々をこねられると、負けて、種吉は随分工面した。だから、辛い勤めも皆親のためといふ俗句は蝶子に當て嵌らぬ。不粹な客から、藝者になつたのはよく／＼の譯があつてのことやろ、全體お前の父親は……と訊かれると、父親は博奕打ちでとか、欺されて田畑をとられたためだとか、哀れつぽく持ちかけるなど、まさか土地柄、氣性柄蝶子には出来なかつたが、といつて、私わを藝者にしてくれんやうなそんな薄情

な親テあるもんかと泣きこんで、あはや勘當さわぎだつたとはさすがに本當のこととも言へなんだ。「私のお父つあんは旦那さんみたいに良え男前や」と外らしたりして惡趣味極まつたが、それが愛嬌になつた。——蝶子は聲自慢で、どんなお座敷でも思ひ切り聲を張り上げて咽喉や額に筋を立て、襖紙がふるへるといふ淺ましい唄ひ方をし、陽氣な座敷には無くてかなはぬ妓であつたから、はつさい（お轉婆）で賣つてゐたのだ。——それでも、たつた一人、馴染みの安化粧品問屋の息子には何もかも本當のことを言つた。

維康柳吉これやすといひ、女房もあり、ことし四つの子供もある三十一歳の男だつたが、逢ひ初めて三月でもうそんな仲になり、評判立つて、一本になつた時の旦那をしくじつた。中風で寝てゐる父親に代つて柳吉が切り廻してゐる商賣といふのが、理髪店向きの石鹼、クリーム、チツク、ポマード、美顔水、ふけとりなどの卸問屋であると聞いて、散髪屋へ顔を剃りに行つても、其店そこで使つてゐる化粧品のマークに氣をつけるやうになつた。ある日、梅田新道しんみちにある柳吉の店の前を通り掛ると、厚子あつしを着た柳吉が丁稚相手に地方送りの荷造りを監督してゐた。耳に挟んだ筆をとると、さら／＼と帖面の上を走らせ、やがて、それを口にくはへて算盤を弾くその姿がいかに甲斐々々しく見えた。ふと視線が合ふと、蝶子は耳の附根まで眞赧になつたが、柳吉は素知らぬ顔で、ちよい／＼横眼を使ふだけであつた。それが律義者めいた。柳吉は些か吃りで、物をいふとき上を向いて一寸口をもぐ／＼させる、その恰好がかね／＼蝶子には思慮あり氣に見えてゐた。

蝶子は柳吉をしつかりした頼もしい男だと思ひ、そのやうに言ひ觸らしたが、そのため、その

仲は彼女の方からのぼせて行つたと言はれてもかへす言葉はない筈だと、人々は取沙汰した。酔ひ癖の淨瑠璃のサハリで泣聲をうなる、そのときの柳吉の顔を、人々は正當に判斷づけてゐたのだ。夜店の二錢のドテ焼（豚の皮身を味噌で煮つめたもの）が好きで、ドテ焼さんと渾名がついてゐたからだ。

柳吉はうまい物に掛けると眼がなくて、「うまいもん屋」へ屢々蝶子を連れて行つた。彼に言はせると、北にはうまいもんを食はせる店がなく、うまいもんは何といつても南に限るさうで、それも一流の店は駄目や、汚いことを言ふやうだが錢を捨てるだけの話、本眞ほんまにうまいもん食ひたかつたら、「二ぺん俺の後へ隨ついていて……」行くと、無論一流の店へははいらず、よくて高津の湯豆腐屋、下は夜店のドテ焼、粕かす饅頭まんぢうから、戎橋筋そごう横「しる市」のどちやう汁と皮鯨汁、道頓堀相合橋東詰「出雲屋」のまむし、日本橋「たこ梅」のたこ、法善寺境内「正辨丹吾亭」の關東煮、千日前常盤座横「壽司捨」の鐵火卷と鯛の皮の酢味噌、その向ひ「だるまや」のかやく飯と粕じるなどで、何れも錢のかゝらぬいはば下手げもの料理ばかりであつた。藝者を連れて行くべき店の構へでもなかつたから、はじめは蝶子も擇りによつてこんな所へと思つたが、「ど、ど、ど、どや、うまいやろが、こ、こ、こ、こんなうまいもん何處イ行つたかて食べられへんぜ」といふ講釋を聞きながら食ふと、なるほどうまかつた。

亂暴に白い足袋を踏みつけられて、キヤツと聲を立てる、それもかへつて食慾が出るほどで、そんな下手げもの料理の食べ歩きがちよつとした愉しみになつた。立て込んだ客の隙間へ腰を割り

込んで行くのも、北新地の賣れつ妓の沽券に關はるほどではなかつた。第一、そんな安物ばかり食はせどほしであるものの、帶、着物、長繻絆から帶じめ、腰下げ、草履までかなり散財してゐてゐたから、けちくさいと言へた義理ではなかつた。クリーム、ふけとりなどはどうかと思つたが、之もこつそり愛用した。それに、父親は今なほ一錢天婦羅で苦勞してゐるのだ。殿様のおしのびめいたり、しんみり父親の油滲んだ手を思ひ出したりして、後に隨いて廻つてゐるうちに、だん／＼に情緒が出た。

新世界に二軒、千日前に一軒、道頓堀に中座の向ひと、相合橋東詰にそれ／＼一軒づつある都合五軒の出雲屋の中でまむしのうまいのは相合橋東詰の奴や、御飯にたつぷりしみこませただしの味が「なんしょ、酒しよが良う利いとをる」のをフー／＼口とがらせて食べ、仲良く腹がふくれてから、法善寺の「花月」へ春團治の落語を聴きに行くと、ゲラ／＼笑ひ合つて、握り合つてる手が汗をかいいたりした。

深くなり、柳吉の通ひ方は段々頻繁になつた。遠出もあつたりして、やがて柳吉は金に困つて來たと、蝶子にも分つた。

父親が中風で寢付くとき忘れずに、銀行の通帳と實印を蒲團の下に隠したので、柳吉も手のつけやうがなかつた。所詮、自由になる金は知れたもので、得意先の理髪店を駆け廻つての集金だけで細かくやりくりしてゐたから、みる／＼不義理が嵩んで、蒼くなつてゐた。そんな柳吉のところへ蝶子から男履きの草履を贈つて來た。添へた手紙には、大分永いこと來て下さらぬゆゑ、

しん配してゐます。一同舌をしたいゆゑ……とあつた。一度話をしたい（一同舌をしたい）と柳吉だけが判讀出来るその手紙が、いつの間にか病人のところへ洩れてしまつて、枕元へ呼び寄せとの度重なる意見もかね／＼效目なしと諦めてゐた父親も、今度ばかりは、打つ、撲るの體の自由が利かぬのが残念だと涙すら浮べて腹を立てた。わざと五つの女の子を膝の上に抱き寄せて、若い妻は下向いてゐた。實家へ歸る肚を決めてゐた事で、僅かに叫び出すのをこらへてゐるやうだつた。うなだれて柳吉は、蝶子の出しや張り奴と肚の中で呟いたが、しかし、蝶子の氣持は悪くとれなかつた。草履は相當無理をしたらしく、戎橋「天狗」の印がはいつてをり、鼻緒は蛇の皮であつた。

「釜の下の方まで自分のもんや思たら大間違ひやぞ、久離切つての勘當……」を申し渡した父親の頑固は死んだ母親もかね／＼泣かされて來たくらゐゆゑ、一旦は家を出なければ収まりがつかなかつた。家を出た途端に、ふと東京で集金すべき金がまだ残つてゐることを思ひ出した。ざつと勘定して四五百圓はあると知つて、急に心の曇りが晴れた。直ぐ行きつけの茶屋へあがつて、蝶子を呼び、物は相談やが駈落ちせえへんか。

あくる日、柳吉が梅田の驛で待つてゐると、蝶子はカン／＼日の當つてゐる驛前の廣場を大股で横切つて來た。髪をめがねに結つてゐたので、變に生々しい感じがして、柳吉はふいといやな氣がした。直ぐ東京行きの汽車に乗つた。

八月の末で馬鹿に蒸し暑い東京の町を駆けずり廻り、月末にはまだ二、三日間があるといふの

を拜み倒して三百圓ほど集つたその足で、熱海へ行つた。温泉藝者を揚げようといふのを蝶子はたしなめて、これからの二人の行末のことを考へたら、そんな呑氣な氣イであつてられへんと尤もだつたが、勘當といつても直ぐ詫びをいれて歸り込む肚の柳吉は、かめへん、かめへん。無斷で抱主のところを飛出して來たことを氣にしてゐる蝶子の肚の中など、無視してゐるやうだつた。藝者が來ると、蝶子はしかし、ありつたけの藝を出し切つて一座を浚ひ、土地の藝者から「大阪の藝者衆にはかなはんわ」と言はれて、僅かに心が慰まつた。

二日さうして經ち、午頃、ごおッーと妙な音がして來た途端に、激しく揺れ出した。「地震や」「地震や」同時に聲が出て、蝶子は襖に掴まつたことは掴まつたが、いきなり腰を抜かし、キヤツと叫んで坐り込んでしまつた。柳吉は反對側の壁にしがみついたまゝ離れず、口も利けなかつた。お互ひの心にその時、えらい駈落ちをしてしまつたといふ悔が一瞬あつた。

避難列車の中で碌々物も言はなかつた。やつと梅田の驛に着くと、眞直ぐ上鹽町の種吉の家へ行つた。途々、電信柱に關東大震災の號外が生々しく貼られてゐた。

西日の當るところで天婦羅を揚げてゐた種吉は二人の姿を見ると、吃驚して暫くは口も利けなかつた。日に焼けたその顔に、汗とはつきり區別のつく涙が落ちた。立ち話でだん／＼に訊けば、蝶子の失踪は直ぐに抱主から知らせがあり、どこにどうしてゐることやら、悪い男にそゝのかさされて賣り飛ばされたのと違ふやろか、生きとつてくれるんやろかと心配で夜も眠れなんだとい